



豊中市教育センター
〒560-0033 豊中市蛍池中町 3-2-1-600
TEL 06-6844-5290
FAX 06-6840-8127
平成21年(2009年)1月30日第35号

一所懸命！

辞典を引くと、①中世、主君からもらった一箇所の領地を生活の基盤として、そこに命をかけること②(やや古い言い方の)一生懸命、と書かれてあります。

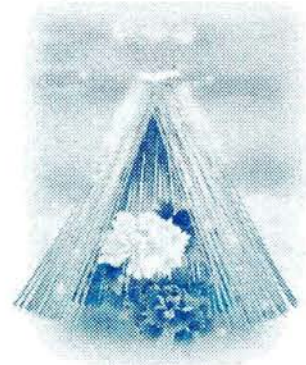
これから、この言葉がぴったりあう歌手、松山恵子さんのお話をします。

昭和12年(1937年)に北九州市で生まれて、平成18年(2006年)に肝臓ガンでお亡くなりになるまで、紅白歌合戦に7回も出場されています。「十九の浮草」で広く認められるようになってから、「だから云ったじゃないの」「東京なんて何さ」等ヒットをとばし、平成7年(1995年)には日本レコード大賞功労賞を受賞されました。これだけ見ると、一見華やかな世界の中で生きた方のように思われますが、それまでには波瀾万丈の人生を送っておられます。兄弟の死。父の事業の失敗。そしてやっと歌手になりスター街道を歩み始めたそのとき、父親が死に、自らも交通事故に遭います。声が出なくなり1年後に復帰したものの、ヒットはなく、旅回りをしながら現役を貫きました。ファンからは、「お恵ちゃん」の愛称で親しまれていましたが、自ら「私はローカル歌手です。」と言い切り、畑の中や漁港など10人程しかいない特設ステージでも「ありがとう」の言葉を贈りながら熱唱しきる彼女の生き方には一所懸命さを感じます。

また先日の新聞記事にも次のような記事がありました。

阪神大震災のその日。前日からいとこが泊まりにきていたので、自分の部屋を譲り、兄と一緒に寝ていたKさん(当時17歳)。震災直後、気づくと天井と床のわずかな隙間に家族は救われたそうです。しかし、いとこはタンスの下敷きとなり、病院へ運んだ甲斐もなく、亡くなっていました。そのときから、Kさんはなぜ自分は生きているのか、問い続けたといいます。大学入学、卒業、そして会社からの内定通知。しかし、自分自身の不登校の経験を生かしながら、人を助ける仕事ができないかと別の大学に入学し、臨床心理士の資格をとられたのです。その後、和歌山県のとある病院の緩和ケア病棟に配属されたKさんは、多くのガン患者と関わっていくこととなります。その中で、「早く死にたい!」と望んでいるある末期ガンの患者の担当になったとき、自分が被災者だということを告げると、患者自身も神戸出身であったことから、思いを少しずつ整理して話すようになったそうです。こうした人の“いのち”と向き合いながら、Kさんは心の中でいとこに問いかけます。「ぼくは、人を助ける道に近づけていますか。」と。

この2人のお話から、人はどれだけ苦労があつたとしても、何かに一所懸命になることができたと感じられるそのとき、自分が「生きていること」また「生かされていること」を実感できるような気がします。新しい年がスタートしましたが、新聞のニュースは今の社会を憂えることばかり。しかし、その中で自分が守り、がんばり通すことのできる「一所」を見つめ直してみたいと思いました。皆さんの「一所」は、何処にありますか? (佐藤)

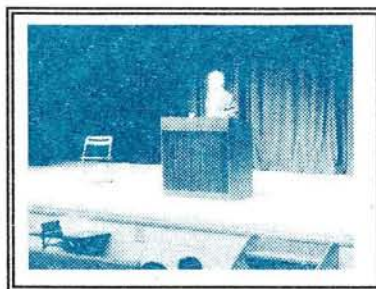


豊中市教育フォーラムを終えて

1月6日（火）豊中市立アクア文化ホールにて、豊中市教育フォーラムが実施されました。

全体を二部構成とし、第一部はこれからの子どもたちの育成について、第二部は研究協力員報告会を行いました。

第一部では、豊中市教育委員会より全国学力・学習状況調査と「確かな学力」向上推進事業における学力・学習状況調査から子どもたちの生活・学習の実態について調査データをもとに報告がありました。その後、兵庫教育大学長 梶田叡一先生から子どもたちを周囲の大人たちがどう育てていくのかということについて、お話いただきました。『ゆとり教育』を推進する中で、『生きる力』を『自ら学び自ら考える力』とし、『自ら』がクローズアップされてきました。教師、保護者、地域の人たちが、本来あるべき姿で、子どもたちに関わっていくことで、人間として、社会人として力をつけられるような学校をつかっていってほしい。」と話を締めくくられました。

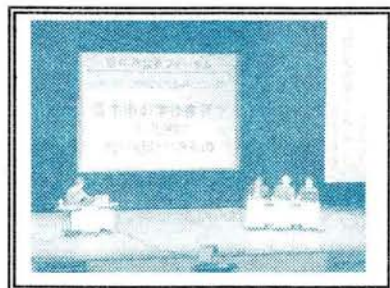


第二部の前半は、ホール外にある通路にて、ポスターセッション形式で豊中市研究協力員報告会を行いました。授業づくりのポイントなど日頃実践してきたことを、どのブースでも工夫して熱く語る姿が見られました。発表側も見る側も互いの距離の近さに、初めは戸惑いが見受けられましたが、熱く語るその姿に「研究協力員の熱心さがよく伝わった。」という温かい感想をいくつもいただきました。

二部の後半のパネルディスカッションでは、「これからの学校教育の柱は、これだ！」として、園田学園女子大学准教授の堀田博史先生をコーディネータ役に迎え、3人のパネリストを交えて実施しました。

パネリストの大阪教育大学准教授の馬野範雄先生には「伝え合う力の育成」を、豊中市立第四中学校長の船曳先生には、夜間学級の実態を含めた「子どもにつけたい力」について、豊中市立寺内小学校の中西先生には「授業で大切にしていること」という切り口で、これからの学校教育について語っていただきました。最後には堀田先生にまとめていただきました。

限られた時間の中ではありましたが、具体的な例示もあり、日頃の実践を整理するよい機会となりました。



第10回 サイエンス・カフェ

「論理とパラドクスの迷宮への誘い」

1月24日（土）10：00～12：00（教育センター6階）

講師は、数学をご専門にされている**大阪大学大学院 教授 藤原彰夫 先生**にお話いただきました。ギリシャの鉄人アキレスと亀の競走。9mの差をつけて、同時に走り出したとき、アキレスは秒速10m、亀は秒速1mとすると、後ろからスタートしたアキレスは、亀を追い越すことができるでしょうか？一次方程式を使えばあっという間に解ける問題です。でも良く考えてみると、アキレスが亀のいた時には亀は一步進んでいるので、永遠に追いつけない？

このように、答えを出すことに意味があるのではなく、“考える”過程自体を楽しむことが数学を学ぶ上で最も大切なのだと、先生は最後にお話されました。時間を忘れたひとときでした。

「サイエンスクラブフェスティバル」

1月31日(土) 11:30~16:00 (教育センター6階)

サイエンスクラブフェスティバルは、小・中学校や高校、大学の科学系のクラブやサークル等が、発表や展示・科学工作などを出展する、年に一度の行事です。

- ・ 「テルミット反応」他 (豊中市立第三中学校理科部)
- ・ 「スーパーボールを作ろう」(豊中市立第四中学校自然科学クラブ)
- ・ 「マイギリ火起こし器でマシュマロを焼こう」(大池小学校土曜スクール)
- ・ 「NHKロボコン大会に出場した歩くロボット等の展示・実演」(大阪府立高専)
- ・ 「バイオで作る不思議な植物」(府立園芸高校バイオ研究部)
- ・ 「DVD分光器を作ろう」(府立千里高校総合科学科)
- ・ 「未来のエネルギーを知ろう、バイオマスの力」(大阪大学サイエンスクラブ)
- ・ 「銀鏡反応」他 (府立北野高校化学研究部) など多数出展予定です。

“理科離れ”が言われる昨今ですが、元気に活動する部員たちと一緒に実験に参加してみませんか。参加自由(無料)ですので、たくさんの皆様のご来場をお待ちしています。

大阪府教育研究所連盟

第18回 研究発表大会について (案内)

2月17日(火) 13:30~17:15

大阪府教育センター 別館5階 第11・12研修室

テーマ 『教育の不易』 ~学校のはたすべき使命とは~

今日的教育課題についての研究実践や連盟の調査研究を発表し、各教育研究所(センター)間および各学校との交流を深め、広く教育活動に資することを目的として、本年度も研究発表大会を開催いたします。先生方のご参加を心よりお待ちしております。

総合司会：箕面市教育センター所長 加賀 康弘 所長

◎部会報告

- ・ 教育相談部会 「子どもへの支援のあり方」

気になる子どもへの支援のヒントー相談事例集ーの刊行に際して

報告者：豊中市教育センター 大屋 由子 副主幹
村田絵美子 主事

- ・ 共同研究部会 「コミュニケーション能力について

~よりよい人間関係をめざして~

報告者：箕面市教育センター 前田 尚子 指導主事

◎基調講演 「しっかり教えて考えさせる教育を」

講師：東京大学大学院 市川 伸一 教授

◎パネルディスカッション

テーマ 「学校のはたすべき使命について」

コーディネータ：豊中市教育センター 十河 秀敏 所長

パネリスト：東京大学大学院 市川 伸一 教授

大阪府教育センター 西川 仁志 所長

枚方市立教育文化センター教育研修課

岩谷 誠 課長

(二次案内にて申し込み可)

「アイ」と「アユム」の親子関係から学ぶ

教育相談に来所される保護者の中には、「どうしたら子どもは○○できるようになるのでしょうか?」「どんな風に声をかけたら○○するようになるのでしょうか?」と尋ねられる方が多くいらっしゃいます。どうしたら子どもをやる気にさせたり、子どもの行動を変化させたりできるのでしょうか。

コンピュータで勉強するチンパンジーの「アイ」をご存知の方は多いと思います。その「アイ」が、2000年に「アユム」を出産し、チンパンジーの研究は『親子関係』や『育児』という領域にまで進んでいます。

「アユム」が生後9ヶ月の時に、まず初めの大きな変化が起きました。それまでずっと「アイ」のおっぱいを飲みながらコンピュータで勉強している「アイ」の様子をじっと近くで見っていた「アユム」が、突然コンピュータの画面を触ったのです。しかも、単にでたために触るのではなく、きちんと3つの画面に触れ、結果として100円玉を手に入れることができたようです。100円玉というのは、食べ物ではないので、食べるためにやっているわけではないということが分かります。では、何故「アユム」の手は動いたのでしょうか?研究者の松沢哲郎先生は、「究極の動機は、親がやっているその通りのことがしたかったのだろう。アイはアユムの行動を褒めて、子どもと喜びを共有するわけでもないし、教示や指示をするわけでもない。ただ、親がやっていることを子どもはじっと見る。それがチンパンジーの教育のあり方だ。」と解説しています。

子どもは親の『言う』とおりにしませんが、親の『する』とおりにしすると言われます。同様のことが重要な他者、つまり子どもにとって影響の大きい大人にも当てはまります。子どもは、大人の側が意図したことではない、何気ない行動をしっかと観察していることもあります。

大人がどんな風にして困難を克服していくか、その過程を子どもはじっと見つめて多くのことを学んでいるのではないのでしょうか。

(金光)

